

弱法師詞章

登場人物

シテ・俊徳丸

ワキ・高安通俊

間狂言・共人

ワキ

かように候者は。河内の国高安の里左衛門の尉通俊と申す者にて候。さても某(それがし)子を一人持ちて候を。さる人の讒言(ざんげん)により暮れに追ひ失ひて候。余りに不便に存じ候程に。天王寺にて一七日(いっしちにち)施行を引き候。今日満参にて候程に。申し附け施行を引かせばやと存じ候。

シテ

出で入りの。月を見ざれば明暮の。夜の境を得ぞ知らぬ。難波の海の底ひ無く。深き思を人や知る。それ鴛鴦の衾の下には立ち去る思を悲しみ。比目の枕の上には波を隔つる愁有り。況や心有り顔なる。人間有為の身となりて。憂き年月の流れては。妹背の山の中に落つる。吉野の川のよしや世とも。思ひも果てぬ心かな。あさましや前世に誰をか厭ひけん。今又人の讒言により。不孝の罪に沈む故。思の涙かき曇り。盲目とさへなり果てて。生をも更へぬ此の世より。中有の間に迷ふなり。本よりも心の間は有りぬべし。伝へ聞く彼の一行の果羅(から)の旅。彼の一行の果羅の旅。闇六道(あんけつどう)の衢(ちまた)にも。九曜の曼荼羅の光明赫奕として行末を照らし給ひけるとかや。今も末世といひながら。さすが名におふ此の寺の。仏法最初の天王寺の石の鳥居ここなれや。立ち寄りて参らん。いざ立寄りて参らん。

ワキ

頃は二月時正の日。真に時も長閑なる。日を得て普き貴賤の場に。施行をなして勧めけり。

シテ

げに有難き御利益。法界無縁の大慈悲ぞと。踵を接いで羣集する。や。これに出でたる乞丐人(こつがいじん)。いかさま例の弱法師な。

ワキ

また我等に名を附けて。皆弱法師と仰あるぞや。げにも此の身は盲目の。足弱車の片輪ながら。よろめきありければ弱法師と。名づけ給ふは理なり。

シテ

げに云ひ捨つる言の葉までも。情ありげに聞ゆるぞや。まづまづ施行を受け候へ。

ワキ

受け参らせ候はん。や。花の香の聞え候。

シテ

おおこれなる籬の梅花が。弱法師が袖に散りかかるぞとよ。うたてやな難波津の春ならば。ただ木の花とこそ仰あるべきに。今は春へも半ばぞかし。梅花を折って頭に挿しはさまざれども。二月の雪

ワキ

は衣に落つ。あら面白の梅の匂やな。

シテ

げに此の花を袖に受くれば。花もさながら施行ぞとよ。なかなかの事草木国土悉皆御法も施行なれば。

ワキ

皆成仏の大慈悲に。洩れじと施行に連なりて。手を合はせ。

シテ

袖を広げて。

同音

花をさへ受くる施行の色々に。受くる施行の色々に。匂ひ来にけり梅衣の。春なれや。難波の事か法ならぬ。遊び戯れ舞ひ謡ふ。誓の綱には洩るまじき難波の海ぞ頼もしき。げにや盲亀の我等まで。見る心ちする梅が枝の。花の春の長閑けさは。難波の法によも洩れじ。難波の

天王寺 四天王寺。も

と聖徳太子が物部氏との争いの時に四天王に請願したのが起源とされ、日本最古の寺院の一つ。

鴛鴦・比目(えんおう・ひぼく) 〓 オシドリとヒラメの事。夫婦仲が良いとされる。

中有の闇 〓 死んだ後未だ次の生を受けない間。一行の果羅の旅 〓 唐の高僧一行阿闍梨が玄宗皇帝の怒りに触れ、果羅の国にながされ闇穴道という道に入ったとき九曜星に照らされたという故事による。

石の鳥居 〓 四天王寺西門の真西にある石の鳥居。鎌倉時代の僧忍性が元あつた鳥居を石造に再建した、現存する最古の石造の鳥居。

時正の日 〓 昼と夜の長さが同じ日。春分の日。難波津の春ならば 〓 難波津に咲くやこの花冬籠り 今を春べと咲くやこの花(古今集序)

梅花を折って「折梅花而挿頭 二月之雪落衣」(和漢朗詠集) 二月の雪は梅の花びらの事

難波の事 〓 津の国のはの事か法ならぬ 遊び戯れまでとこそ聞け(後拾遺集宮木)

法によも洩れじ。それ佛日西天の雲に隠れ。慈尊の出世まだ遙。三会の暁未だなり。

佛日〓釈迦を日輪に喩えた言葉。慈尊〓弥勒菩薩。三会〓弥勒菩薩が釈迦入滅後に現れて衆生済度の為に行う三度の法会。

然るに此の中間に於て。何と心を延ばへ(め)まし。これによって上宮太子。国家を改め萬民を教へ。佛法流布の世となして。普く御法を弘め給ふ。

即ち当寺を御建立あつて。中間〓釈迦入滅後、弥勒が現れるまでの時期。上宮太子〓聖徳太子。震旦国〓中国。思禅師〓慧思禅師の事。中国天台宗の第二祖とされる。

シテ 即ち当寺を御建立あつて。始めて僧尼の姿を現し。四天王寺と名付け給ふ。

金堂の御本尊は如意輪の佛像救世観音とも申すとか。太子の御前生。震旦国の思禅師にて。わたらせ給ふ故。出家の佛像に応じつつ。今日域に至るまで。佛法最初の御本尊と。現れ給ふ御威光の。真なるかなや末世相応の御誓。然るに当寺の佛閣の。御作の品々も赤梅檀の靈木にて。塔婆の金宝に至るまで。閻浮檀金なるとかや。

萬代に。澄める亀井の水までも。赤梅檀〓香木の一種。閻浮檀金〓閻浮樹の下の河から出る砂金。最上の金。

水上清き西天の。無熱の池水を承け継ぎて。流久しき代々までも。五濁の人間の導きて。済度の舟をも寄するなる。難波の寺の鐘の声。異浦々に響き来て。普き誓満潮の。おし照る海山も皆成佛の姿なり。

これなる者を如何なる者ぞと思ひて候へば。某が追ひ失ひし子にて候はいかに。思の余りに盲目となりて候。あら不便と衰えて候や。昼は人目も定かに候へば。夜に入り某と名宣り高安へ連れて帰らばやと存じ候。いかに弱法師。日想観(じつそうがん)の時節なれば急ぎ参り候へ。げにげに日想観の時節なるべし。盲目なればそなたとばかり。心あてなる日に向ひ。東門を拝み南無阿弥陀佛。

シテ 同音

萬代に住める亀井の〓「萬代にすめる亀井の水やさは富の小川の流れなるらん」(後拾遺集弁乳母) 亀井堂は四天王寺講堂の東にあり、ここに出る亀井の水は金堂の地下から湧き出ているとされ白石玉出水、または影向の水ともいう。

ワキ 西門を出でて極楽の。東門に向ふは僻事(ひがこと)か。

ワキ

げにげにこも難波の寺の。西門を出づる石の鳥居の。

ワキ

阿字門に入つて。阿字門を出づる。

シテ

やあ東門とは謂はれなや。ここは西門の石の鳥居よ。

ワキ

あら愚かや天王寺の。西門を出でて極楽の。東門に向ふは僻事(ひがこと)か。

シテ

極楽の。

ワキ

東門に向ふ難波の西の海。

シテ

入日の影も。まがふとか。

同音

あら面白や我盲目とならざりし前は。弱法師が常は見馴れし境界なれば。何疑も難波江に。江月照らし松風吹き。永夜の宵清何の為す所ぞや。

シテ

住吉の。松の木間より眺むれば。

同音

月落ちかかる。淡路島山と。

シテ

詠めしは月影の。今は入日や落ちかかるらん。日想観なれば曇も波の。

同音

淡路絵島。須磨明石。紀の海までも見えたり見えたり。満目青山は心にあり。

シテ

おお見るぞとよ見るぞとよ。さて難波の海の致景の数々。

シテ

南はさこそぞと夕波の。住吉の松原。

同音

東の方は時を得て。

シテ

春の緑の草香山。

同音

北はいづく。

シテ

難波なる。

同音

長柄の橋の徒(いたずら)にかなたこなたと歩く程に。盲目の悲しさは。貴賤の人の行き合いの。転び漂ひ難波江に。足許はよろよると。げにも真の弱法師とて。人は笑ひ給ふぞや。思へば恥づかしやな。今は狂ひ候はじ。今よりは更に狂はじ。

今ははや夜も更け人も静まりぬ。如何なる人の果やらん。其の名を名宣り給へや。

シテ

思ひ寄らずや誰なれば。我が古を問ひ給ふ。高安の里なりし。俊徳丸が果なり。

同音

さては嬉しやこれこそは。父高安の通俊よ。

シテ

そも通俊は我が父の。其の御声と聞くよりも。胸打騒惱れつつ。

同音

こはいかにとて。

シテ

俊徳は。

同音

親ながら恥づかしとてあらぬ方へ逃げければ。父は追ひ附き手を取りて。何をか包む難波寺の鐘の声も夜紛れに。明けぬ前にと誘ひ。高安の里に帰りけり高安の里に帰りけり。